

三重大学 海女研究センター だより vol.3

三重大学海女研究センター (三重大学人文学部総務担当) ☎059-231-6991

学生の見た海女漁村

3年前の海女研究センター開設以来、三重大学人文学部の学生たちも鳥羽市内でさまざまな研究活動に参加してきました。今回は、これまでに学生が主体となって関わった活動内容について紹介します。

まず平成31年2月に答志島へ赴き、海女さんを始め地域のかたがたから、漁業や食文化に関する聞き取りを行いました。また、アラメやフノリなどの海藻を用いた料理を考案し、実際に調理して食べていただきました。幸い、好評をいただきました。

しました。鳥羽高校の生徒さんにも協力してもらい、一般のかたがたにわかりやすい説明となるよう、試行錯誤しました。

去年は、国崎町で開催された「海辺の毎日 国崎の暮らし写真展」に参加し、町内外から訪れたかたがたにインタビュウを行いました。昭和期の漁村の生活を学ぶ、貴重な機会となりました。

そして今年2月には、鳥羽磯部漁協・石鏡支所にて「浜の遠声 石鏡の暮らし写真展」が開催され、昨年同様に聞き取りと巡見を行いました。石鏡町は急こう配の坂に家々が軒を連ね、階段の上り下りが大変ですが、高台からの海の眺めがすてきな地です。写真展会場や町内で、石鏡のみなさんにさまざまなお話をうかがいました。

浜が埋め立てられた際に時代の流れを感じた話。「おら潮浴び行くで」と学校が終わると海へ潜りに行った話。弓引きの写真のなかに亡くなったご家族を見つけ、思わず感涙したかたもいらっしや

いました。写真の説明だけでなく話に花が咲いて、お一人お一人の思い出をうかがうことができ、とても実りある時間を過ごしました。

参加した学生たちのほとんどが県外出身ですが、地元のみなさんが温かく迎えてくださったおかげで、漁村や海女文化を深く学び、ぐっと身近に感じることができました。

これまで活動してきた6名の学生は卒業しますが、新たに参加した後輩たちが引き継ぎ、さらなる研究に励みます。どうぞこれからもご協力をお願い申し上げます。



石鏡町での聞き取りの様子

鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記



vol.17

～シオミドロの話～

水産研究所 ☎(25)3316



港などのロープに生えるシオミドロ。見かけたことはあるはずだ



ケノリのようにも見えるが、ずっと細い繊維状の体である



マイクロメートル 繊細な体は太さ20μm程度。ところどころ胞子が入った袋ができていくのがわかる

今回は褐藻シオミドロ。港や定期船乗り場のアンカーロープやフロートなどに絡みついて生えている茶色い色をした長さ20cm程度の海藻である。天然では浅場に生える他の海藻の表面に付着していることもある。海藻と言ってもそうは見えないに違いない。綿をほぐしたような糸が絡まった房状の「ドロドロ」として視界の端に入ったことくらいはあるはずなのだが。

この海藻、船体などに大量に生えることで航行速度を落とし、さらには、タンカーなどのバラスト水などに紛れて本来は生えていない国にまで分布を広げ、生態系を乱すことから地球規模でもあまり良

い印象を持たれていない海藻でもある。そして食用になることもない。食べても毒はないが、じやりじやりしており舌ざわりもよくない。悪口はこれくらいにしておこう。シオミドロは、コンブやヒジキ、ワカメなどを含む海洋生物中ではその繁殖域の広さや多様性において大成功を収めている褐藻類のモデル生物なのである。モデル生物というのは、そのグループの生物の遺伝的な研究などをする際の代表的な種ということである。平たく言うと、世界中で研究される種類ということだ。

実験室内で培養しやすい、世代時間が短い、無菌状態を作りやすいなどさまざまな条件を満たしている。2010年には全ゲノムの塩基配列が解読された。シオミドロと同じくモデル生物として候補に挙がっていた褐藻こそが、鳥羽の人が愛してやまない「毛のり(カヤモノリ)」であったということもお知らせしておこう。